
触手になろう！

ささやか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

触手になろうつい-

【Zコード】

Z1515BA

【作者名】

わわやか

【あらすじ】

就職難にあえぐ大学4年生・高崎は、公衆トイレで触手に遭遇。妄想かと疑う高崎に、触手は驚きの提案をする。「触手になつて働きませんか?」

無駄にテンションの高い電波系メティ、でじょつか。ちなみにH要素は皆無でござります。触手なのに。

第一話　『出合いは公衆トイレから!』

「社会なんて、社会なんて、糞喰らえだあああああ！」

児童公園に、俺の絶叫が虚しく響く。時刻は深夜。偶々通りすがつた残業帰りの中年サラリーマンから、（まあ、若いうちはそんなこともある。わかるよ）と同情と驚きの入り混じった一瞥を貰うだけで、他に何も起きない。事態は好転しない。暗転もしない。

「……もう消えてなくなってしまいたい」

一月の風は余りに冷たく、心身共に凍つていいく。

「就職とかもう普通に無理だ。……どうせ俺は駄目人間なんだ」

酒臭い息と吐いた言葉は優しく、だが鋭く自らの心を切り裂いた。

「 そうだ、無理なんだ。どうせ俺は社会不適合者なんだ。無理に決まってる。特に志望もないし、特技もないし、大学時代だって適当にサークルやつてだらだらと単位を取れる程度に勉強してただけで特別なことなんて何もやつてないし、体力も知力も才能も根気も人格も長所もないし……、ああ、駄目だ。駄目なんだよ、畜生！」

そもそもあれだよ、あれ。最近の就職活動つておかしいだろ、いや絶対おかしい。テレビとかでも言つてたし。あつ、教授も言つてた。これはもう間違いないな。ほら、学生の本分は勉学だろ？　なのに三年なんて一番脂の乗つた時期に上辺だけの志望動機を必死に考えさせるなんて馬鹿げてるだろ。なんだよそれ。絶対おかしい。おかしいって。学生は企業の掌の上でいかに上手くピエロみたいにダンスが踊れるかが試されてさ、でも企業だつて意味のないダンス

を踊らせるように踊らされてるんだ。滑稽だ。無様この上ないな。でさ、優等生な模範的建前つて言えば舌触りも良いけど、結局それつて嘘じやん。そんなこと本氣で心の底から思つて考へることの出来る奴らばつかだつたら世の中もつと上手く回つてゐるつて。といふか死ね！ 半分くらい人類死滅しろ！」

握りしめていた缶ビールの残りを一気に煽る。炭酸も抜けぬるくなつたビールは酷く不味かつた。といふかそもそもビールが嫌いだつた。

「大怪獣が来て、世界を滅ぼせば全て解決するんだ！ 早く来い！ ……あーあ、生まれ変わつたら高等遊民でいたい」

「ゴミ箱めがけて空き缶を投げる。カコンッ、と無機質な音を立てゴミ箱に届くことなく地面に落ちた。最高に最低な気分だつた。悲しくなる。自分はゴミを捨てる」とすら満足に出来ないのだ。

重い腰を上げて今度こそ確実に投げ捨てる。ふう、と溜息をつく。尿意を覚えた。ビールの飲み過ぎだ。ついでに公衆トイレまで足を運び、用を済ませる。

どこにでもあるような公衆トイレだつた。汚く、みすぼらしい。どうして公衆トイレといつのはどれもこれも汚れているのだろうか。皆公共の物だと思うと、使い方が雑になるのだろうか。それとも年代物で設備が旧式だからそう見えるだけで、実は意外と清潔なのだろうか。それか何か他に理由があるのだろうか。

そんな益体もない」とを考えながら中に入ると、そこには触手がいた。

触手がいた。

「ハフ」

女の声で可憐な悲鳴を上げた。

うん、あれだ、あれ。一体どうやって声を上げていいんだろ？
口つてあるの？ 謎だ。実に謎だ。非常に興味深い……、って

触手だよ！ なんかイソギンチャクみたいな触手が壁面という壁面から湧き出てトイレでうようよ蠢いてるんですけど！ 大きさ？ 中学生の腕くらい！ 色？ なんかアダルトサイトみたいなピンク色！

「ばー、ばー、ばけ、いや、触手だああああああああー。」

俺と触手の悲鳴が絶妙なハーモニーを奏でる。そりやあもつ奏でるつたら奏でる。

俺は走った。

全力で走った。韋駄天を軽く追い越すような激しいスピードで逃げた。警官に見つかったら、職務質問自分錯乱病院搬送人間失格コース行きが間違いないくらい必死だつた。なんか生きてる気がした。気分がハイなつてきた。最低に最高な気分だつた。

「人生つて……！ 素晴らしい……！ つなわけねーだろ！ なんで触手なんだよ、おかしーだろ！」

あれだ、あれ。とうとう貧相な頭が、人生の荒波に耐え切れなくなって幻覚を見るようになつたのだ。幻聴を聞くようになつたのだ。だけど内容が触手なのは俺の想像力が貧困だからなのだ。きっとそうだ、そうなのだ。

さあ、急いで我が家に帰ろう。俺の膀胱も限界が近い。

第一話『就活生はつやきよつも傷つけないのです。注意つー』

神様がいるとしたら、そいつはどんな顔しているんだろう。そして今、どんな表情をしているんだろう。

なんてことはどうでもよかつた。とにかくどうでもよかつた。

それよりもバスが五分遅れているとか、隣のおばさんの香水がきつすぎてもはや臭いとか、スーツを着るとやつぱり息苦しいとか、そんな馬鹿みたいに些細なことが重要で仕方なかつた。

そしてもうと重要なのは、俺はやっぱり駄目人間だということだ。また、落ちた。残っているのは後一社。

痛い。胃が痛い。もしもこれで内定が取れなかつたら、俺はどうすればいいのだろうか。就職浪人か、フリーターか。あるいは社会不適合者としてその適性を十二分に發揮するのだろうか。胃が、とても痛い。気分が悪い。死にたい。死んでみたい。

気分転換がしたくて、というか日常的生理作用がしたくて、俺はトイレに行きたかった。バスを降りてから早急にトイレを探す。神様よりもトイレが必要だった。

だが無い。無かつた。トイレが無い。トイレはどこだ！　俺はさながら犠牲者を求めるゾンビのようになり、トイレを探す。なんとかコンビニに飛びこみ、トイレを借りる。

正に危機一髪。紙一重の攻防だったと言つても過言ではない。俺

は便座に深く座りこみ安堵した。

そしてふと顔を上げると、触手がいた。

触手がいた。

「あ、あの……」

前回と同様可愛らしい声。

うん、あれだ、あれ。今の俺つて普通に逃げ場ないな。排泄中の
人間つてとっても無防備。戦国時代の武将が気を遣つていたのが実
感出来るよ。

いや、待て。そうだ、思い出した。これは俺の貧困な想像力が就
職戦争に倦み疲れて生み出した幻覚・幻聴であり、何も恐れること
はないのだ。そうだ、その通りだ。立ち向かおう。自らの社会不適
合者としての象徴と対峙して、打破するのだ。物は試しと人は言つ。

ならば、と俺は触手にふれてみた。ふにっとな。

「はわつ

驚きの声が触手から上がる。

だが俺の驚きはそれ以上だった。うわー、柔らかい。ふにふに。
ふにふに。人肌のように柔らかい。俺は無言でさわり続ける。もう
あれだ、あれ。どうにでもなれ。

「や、やめてください！」

「俺が言いたいわ！ 触手は妄想に帰れ！」

我に返り大声で叫ぶ。幻覚のくせになんて感触があるんだよ！

「わたし、妄想じゃないです！」

「つるわい、帰れたら帰れ！」

「話せばわかりますー！」

「まず『ハロニケーション』がとれる」と自体が理解不能だわ！ 口
どいだよー！」

「無いです。触手ですから」

「無いのかよー！」

「テレパシー的なアレです」

「アレの部分を詳しく説明しろー！」

衝動的に叫びながら自分が触手と意思疎通が出来てることに気づいてしまう。すると、ここまで興奮していることが一気に馬鹿らしくなる。なんかもういいやいや、よくない。

「……もう、なんだよ、これ。わけわかんねーよ

俺は大きな溜息をつき、深く頃垂れた。便座・the・考える人
になる。

ちつ、ちつ、ちつ、ちーん。

よし、決めた。適当に流して現実に帰ろう。そしてこの「」とはネタにしよう。「なあなあ、以前トイレに行つたらなんか触手がいて～」みたいな。飲み会で言えばそこそこウケもとれるだろ？。それでいいや。

「あの」

触手のくせにひりを残すよつた声面で囁く。

「大丈夫ですか？」

「ああ、うん。オッケー、オッケー。じゃ、そういうことだ」

俺はF1レーサー顔負けの速さでトイレからの脱出を試みる。

が、「待つて」と素早く触手にからめ取られた。やっぱり柔らかい。絶妙な弾力。女の子のおっぱいを彷彿させる。

「話を聞いて下さー」

「嫌だ、話せどわからぬー。俺は現実に帰るんだあー！」

しかし触手の力は強く、懸命の脱出活動が実を結ぶことはなかつた。

「どうか話を、話を聞いて下さー。お願ひします」

触手はぐねぐねとその身を揺りし哀願する。哀願するつたら哀願する。

「お時間は取らせてません、五分、いえ三分で結構です。どうかお願
いします」

「えつと……」

「お願ひします。この通りです」

「ああ、うそ」

「どの通りだよ。」

「あー……」

でもあれだよね、もしここで断つたら俺、悪い人？なんか罪悪感がちくちくするんだけど。いや、そうだよ、ここで断つてもなんか気分悪いし精神衛生上非常によくないよね、そうだ、それならいつまで自分の生み出した幻覚・幻聴と対峙して、見事克服してやろう。それだ、それで行こう。キャッチフレーズは「自分から逃げない俺」。よし、かつこいい。

「わかった、わかったよ。話を聞くよ」

「本当ですか？ 嘘ついたら触手千本飲ませますからね」

「地味に恐ろしいな、おい

「えーと、それでは

「ほん、と触手は可愛らしい空咳をしてから言つ。

「一緒に働きませんか！」

「……………は？」

「だから触手になつて働きませんか？」

「……………はあ」

「えつと、その、お仕事、大変んですけど、やりがいもありますし、それなりにいいこともあるし、きっと待遇もまあまあだと思います。どうですか？」

いや、どうですかと言われても……。それ、「人間辞めませんか？」ってことじゃん……。

「慣れれば平氣です、慣れれば！ 最初はうねうねして上手く動けないんですけど、慣れれば自由自在に操れますから。ほりつ」

触手がうねうねとのたうちまわる。妙に煽情的だった。

だが俺の頭脳は処理能力が低いからか、自分の置かれた境遇を認識出来なかつた。いや、違う。落ち着け。俺は悪くないだろ。状況が異常なんだよ。

そして戸惑う俺に対し、触手は禁断の台詞を口にした。

「お仕事、決まらないんですね」

プチン

姑が嫁に向かつて、「ねえ、まだ」どもできないの?」つて嫌みつたらしく尋ねるようなことするな!」らあー、こちとらナーグアスなんだよー。

「お前なんかに、お前なんかに就活の苦労がわかつてたまるかあああああああああああああ！」

触手のくせに触手のくせに触手のくせに触手のくせに！

「だらつしゃあああああー。」

ああつ

俺は無理矢理触手の拘束を振りきってトイレから逃げ出した。

「待つて、待つて下さーい」

触手の声だけが追いかけてくる。

誰が待つか。

第三話『とつあべす氣のせい』

「コンビニの店員に、「あまりトイレで叫ばないで下さい。叫ぶならカラオケ行って下さい。それか死ね」と軽く注意されたあと、俺は大学に無事到着した。今日はサークルの集まり（正確に言うと飲み会）があるので。就活用に買った地味な腕時計で時刻を確認する。少し遅れそうだが、まあこのくらい許容範囲だ。

「あ、高崎さん」

「ひんまりとしたキャンパスを歩いていると、とてとてと小走りで「ひりひり」やってくる女の子がいた。サークルの後輩、佐藤だ。

「なんだ、佐藤か」

「なんだとはなんですか。失敬です」

「わづか？」

「そうですよ。可愛い後輩じゃないですか、可愛いがって下さい。具体的にはジュースおじいって下さい。オレンジジュースがいいです」

「調子に乗るな」

俺は歩調を速める。遅れた佐藤が慌てて追いかけてきた。

「あつ、ちゅうと、速いですって。置いてかないでくださいよ」

「つるへえ。寄るな、さわるな、近寄るな
「また子供みたいな」と

佐藤が苦笑いを浮かべる。栗毛のショートボブが彼女の思いを追従するかのように揺れた。

「とこつか寄ると近寄るって意味が重複してますよね」

「確かに。じゃあ聞こ直そう。寄るな、さわるな、単位を落とせ」

「最後が無駄に悪意満載なんですねー?」

「実際に氣のせいだ」

「いやいやいやー...」

それから佐藤は俺の台詞がいかに極悪非道かを滔々と説明しだしたが、それはさておき、俺は触手のことを思い返していた。

あの触手は一体なんなのだろうか。俺の脆弱な精神から生み出された妄想ではない……? うん、ないな。ないない。そろそろ現実的に非現実を直視しよう。しかし何故に触手? そして何故に仕事を斡旋する? わけがわからねえ。触手って口本とかそういうテリトリ限定の存在じゃないの?

「聞いてますか、高崎さん!」

「ん? ああ、聞いてる聞いてる。また田高になつたな。これ以上続くと輸出産業がもたないから、確かに前のこと通り、更なる政府介入を本格的に検討するべきだらうな

「あじらい方があまりに古典的かつ適切ー。」

「氣のせいだる」

「そんなこと言つたら、世の中の大半は氣のせいで説明出来ますよー！」

「氣のせいだる」

第四話『一度あることは三度ある』

「つまりは、我らが高崎君はまた落とされた、といつわけか！」

塚本が俺の悲惨な就活状況を豪快に笑い飛ばす。酒も入っているからだろう、陽気な苦笑が周りに響く。

「……いや、笑い話じゃないから」

俺は憮然として溜息をついた。塚本はまだ大学院に進学するからいいが、こちとら絶対零度の戦線で体を張っているのである。

「まあまあ、大丈夫だつて」

赤い顔をした塚本は俺の背中を勢い良く叩く。バシッバシッと軽快な音が鳴る。鳴るつたら鳴る。痛い。体育会系の塚本は気の良い奴だが乱暴なのが玉に瑕だ。

「なんとかなるつて、なんとか」

「……そう信じていたらここまで来てしまったんだ。もうその言葉は信じられない」

「いやまー、大丈夫だつて」

「根拠は？」

「勘。なんとなく

「なんだよ、それ」

釈然としない焦燥感をカルアミルクで飲み下す。うちのサークルには「とりあえずビール」という悪しき風習は存在しない。ビバ・カルアミルク。俺は甘党だった。

「んー、じゃあ、ほら、あれだよ、あれ」

「だからなんなんだよ」

「ほら、あれだよ。ねつ、久木さん、わかりますよね？」

「ああ、うん。まあわかるよ」

俺と塚本のやり取りを傍観していた久木さんは、穏やかな笑みを口元に浮かべて答える。

「ほらみる、偉大なる先代部長のお言葉だぞー！」

「高崎君なら、なんだかんだちやんと納まるといひに納まるよ」

久木さんはのんびりと、そういう。

「ねえ高崎君、たとえばの話だけど」

「はい、なんですか？」

「年に一度だけ現れて、なんでも願いを叶えてくれるサンタクロース。なんと今年はあなたの願いを叶えてくれることになりました。

さあ、どうしますか？

「あつ、それって　」

「なんだ、もしかして知ってる？」

俺の反応をみて、久木さんの口元がほころぶ。

「はい。あれ、いい話ですよね」

読んだことがある。有名なSF作家のショートショートだ。

「うん、あれ、好きなんだよね」

久木さんは嬉しそうにはにかむ。

「でね、大丈夫。高木君はなれるよ、最初の青年に。その権利を名前も知らぬ少女に譲つた青年に」

「そり、ですかねえ」

自信がない。そんなときが来ても、俺は自分のちんけな欲望のために願いを使つてしまつ気がした。

「そうだよ。なんかねえ、高崎君は結局他人のために頑張れる人だから」

「はあ」

「褒めてるんだよ？」一応

「はあ」

面映ゆい。塙本はうるさいが、久木さんは人が良すぎた。

「ちよ、トイレ行つてきます」

俺は席を立つ。「あ、高崎さんが逃げてる」と佐藤の酔つた声が背中に降りかかる。違つ。逃げてない。戦略的撤退だつての。

といつわけで俺はトイレに行く。引戸を開けた。

さて、ここでクエッション。

Q・トイレには何がいるでしょ？

A：触手

「こんにち」「だが断る」

俺は引戸を開めた。

ふう。……酔つてるかな。足取りはちゃんとしてるんだけど。

このまま戻つてしまおうとも思つたが、やはりトイレに行きたい。膨れ上がつた欲望を解放したい。もう一度引戸を開け「こんにちは！」

ぶわっ！

触手が恐るべき速さで俺をトイレの中に引きずりこむ。ここで俺のホースがなんちゃってビールをぶちまけなかつたのは、一重に俺のホースが特別製であつたからだと強く主張したい。

触手はぐねぐねと元気良く蠢き、俺をきつりと拘束していた。

「待て。話せばわかる」

俺は必死の説得を試みた。いくら特別製といえども限界が近い。生理現象には勝てなかつた。

「離せ！ 離してくれ！」

「最後まで話を聞いてくれるなら」

「違う！ その前に離せ！」

「駄目です！ また逃げちゃうかもしれないです！」

「いいから離せよー！」

なんのためにトイレがあると想つてんだコラ！ 排泄するためには禁断の手を使うことにした。具体的に言つて、ホースを股ぐらから取り出した。ポロッとな。

「ひゃうえあー！」

触手が乙女の悲鳴を上げる。

触手はぐねぐねとのたうちまわる。ついでに拘束が解ける。俺はこれ幸いとホースから発射した。無論、便器に向かつてである。

「隠して下さい！見せないで下さい！」

「……」はトイレだ。俺には健康で文化的な排泄をする権利がある

「三の前に女の方いるんですね! 気をつかひてくださいよ!」

一
あ、
噬
ん
だ
」

触手のくせに

「ええ、噛みましたよ！　噛みましたとも！　それが何か問題でも

口ないじやん。テレバシー的なアレなの」「いや、て囁んだんだよ。

「どうか性別あつたのか……」

「ありますとも。レディーです。現役バリバリのレディーです！」

一現役のレディーはバリバリなんて言葉を使わないとと思うが

「使うんです！」

「左様ですか」

「左様ですか」

「……んじゅ

用を済ませた俺は、さしげなくかつ鮮やかにトイレからの脱出を

試みる。

「だから待つで～～～。」

が、駄目だった。触手のくせにじつにじつにじつにじつにじつに

「手を洗つてなこじやないですか～～～。」

「や」

外の流しでしあと洗つまつだつたわ！

「そして向むり流せないで下をこ～～～。」

「使用後にトイレを～～～。」

「わたしの話をですよ～～～。わざとですよね～～～。」

「じゅうじゅうとかと言わなくともわざと

「や」

「や」

「や」

「…………うひゅらあ~~~~~！」

触手が奇声をあげてのたうち回る。先生、今のは何語ですか。はい、あれは触手語です。和訳すると「ディス・イズ・ア・ペン」になります。先生、和訳できません。

「もういいから話を聞いてよ！」

「また今度な」

「親が子供の駄々をなだめるための常套手段！」

「やはり触手には効かないか……。人外だしなあ

「そういう問題じゃなくて　」

そして触手は衝撃の一言を放った。

「というか、そもそも、わたし、人間ですかー！」

第四話　『一度あることは二度ある』（後書き）

星新一「ある夜の物語」　未来いそっぷ（新潮文庫）　収録

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1515ba/>

触手になろう！

2012年1月5日22時48分発行